

It is not the mountain

We conquer but ourselves

我々が征服するのは山でなく自分自身である。

エドモンド ヒラリー
~Edmund Hillary

ふるさとの風

山粧う—

~神無月~

一日一山 一步一生

— 東浦奈良男 魂の山行 —

春山淡冶にして笑ふが如く、夏山は蒼翠にして滴るが如し。

秋山は明浄にして粧うが如く、冬山は惨淡として眠る如し。

— 臥遊録 —

山は四季折々に美しく装いを変え、訪れる季節ごとに感動を与える。
人々はその素晴らしさに魅了され山を登り、何かを信じ何かを求め山頂をめざす。

一万日連続登山達成を人生後半の目標にしていた東浦奈良男氏が、志半ば平成23年(2011)12月6日他界した。86歳であった。

東浦奈良男氏は大正14年(1925)大阪市に生まれた。その後昭和20年(1945)に度会郡小俣町(現伊勢市小俣町)へ移住し印刷会社に勤めていた。山の魅力にとりつかれたのは35歳の時、家族4人で登った乗鞍岳。頂上で目にした“歩きたくなるような”雲海の彼方に白山が浮かぶ絶景に感動し、登山のとりこになった。42冊に及ぶ52年分の“山日記”もこの乗鞍岳から始まっている。

馴れそめの、そもそもの山登りである。

あの平湯峠の白山の神々しい姿がなかりせば、これほど病みつきにもなるまい。…

雲海の山に打たれて生を決す 雲海の山あるかぎり金借む

昭和35年(1960)8月21日

その後働きながら退職までの25年間の週末登山は、地元の間々だけに限らず全国の名峰にも及んだ。昭和36年(1961)には初めて富士登山に挑戦。この時、途中で挫折し闘志をかき立てられた事も連続登山への要因になった。古くから日本人の心の拠りどころである富士山は東浦氏にとっても特別な存在であった。生涯を通じての富士山登山は368回にも及んだ。

昭和59年(1984)定年退職した翌日から連続登山への挑戦が始まった。連続登山のきっかけは、比叡山の千日回峰行の本を読み影響を受けたことが大きいという。それは修行僧のような荒行に挑戦し続け、最も好きな富士山に登るための体力を保つためであったのかもしれない。登る山は朝熊山や鼓ヶ岳など主に地元の山々である。早朝自宅を出て徒歩で現地へ向かい登頂し、夕方に帰宅。雨の日も風の日も事故に遭った時でさえ一日も休まず黙々と歩き続けた。夏場には富士山にも登るが、連続記録が途切れないようにと夜行列車を利用し、翌日は地元の山に登って記録をつないできた。その影にはいつも家族の支えがあった。家族あつての記録である。感謝の気持ちがさらに山へと向かわせる。愛妻かづさんの写真は常に一緒であった。一人でなく二人で登っているのだ。

「一万日登山という記録のプレゼントをしたいんです。
ダイヤモンドを買うお金がないですから、記録をプレゼントします。」東浦氏はそう言ったという。

記録が途切れたのは平成23年(2011)6月25日。春に体調を崩した後、極度の衰弱で登山を断念…。最後に登った山は大仏山であった。連続登山日数は9738日。
記録達成予定日は平成24年(2012)3月12日だった。“一日一山”27年間の途方もない記録である。

東浦氏が座右の銘にしていた徒然草の一節がある。

一事を必ず成さんと思はば、他の事の破るるをも傷むべからず。

人の^{あざけ}嘲りをも恥づべからず。万事に換へずしては、一の大事成るべからず。

この言葉に彼の魂のすべてが凝縮されている。

山粧う富士山に初冠雪が見られる頃、うっすらと雪化粧した雄大な姿を仰ぎ見る聖人の姿がある。
彼はやがて一步踏み出すだろう…

その先にある己の大事を成すために。

※この文章は吉田智彦氏著「信念 東浦奈良男 一万日連続登山への挑戦」を参考にさせていただき作成したものです。

◆信念 東浦奈良男 一万日連続登山への挑戦 (吉田智彦/著 山と溪谷社)

図書館だより
2012年10月号より